

医師部門 受賞者

高橋 幸宏

公益財団法人 榊原記念財団附属 榊原記念病院 副院長

心臓外科医として、7000名の子どもたちの命を未来につなぐ



高橋 幸宏

Yukihiro Takahashi

公益財団法人
榊原記念財団附属
榊原記念病院 副院長

1981年、熊本大学医学部卒業。熊本赤十字病院での研修医コースを修了後、榊原記念病院へ入職。同院にて、一貫して小児の心臓血管外科の研鑽を積む。1998年、榊原記念病院心臓血管外科部長。2003年、同主任部長。2006年より現職。体への負担の少ない手術とは、手術時間が短い手術であると、その実現のために小児用超小型人工心臓の開発や、医師・看護師など手術を支えるチームの人材育成に取り組む。著書に『7000人の命を救った心臓外科医が教える仕事の流儀』（致知出版社）、『榊原記念病院 低侵襲手術書』（読書人）など。

推薦者

江沢 泰一

神宮(伊勢神宮)神宮司庁 神宮宮掌

神永 芳子

一般社団法人 全国心臓病の子どもを守る会 会長

坂本 喜三郎

静岡県立こども病院 院長

矢崎 義雄

学校法人東京医科大学 理事長

横田 南嶺

臨済宗大本山 円覚寺 円覚寺派管長
花園大学 総長

チーム医療が生んだ成功率98.7%

高橋幸宏氏が27歳で榊原記念病院に入職した1980年代は、まだ小児心臓手術の黎明期。複雑先天性心疾患の多くは手術が困難で、術後の生存率も極めて低かった。オペをくり返す中で高橋氏は、“子どもの体に負担の少ない低侵襲の手術とは？”と自身に問い続ける。当時は輸血用血液製剤の品質が低く、肝炎に感染するケースがあった。いかに輸血をせずに手術を終えるか、低侵襲な手術を実現するかを目標に据えた。

心臓外科手術が他の手術と大きく異なるのは、全身への酸素供給を身体の外で管理しながら、その間に心臓を止めて手術を行う点。これを体外循環という。体にとって非常に非生理的で体への侵襲(負担)が大きく、心臓以外の臓器に炎症反応など悪影響が起きることもある。大人でさえそうなのだから、体が小さく、まだ各臓器機能の発達が未熟な子どもなら尚更だ。そこで心臓以外の臓器への悪影響を抑えるため、医療機器メーカーがタッグを組み、人工心臓の中を通る血液を可能な限り少なくする研究を開始。超小型人工心臓の開発に成功した。これにより、低体重児においても無輸血手術が可能となる。

心臓手術は体への侵襲が大きいので、術時間を少しでも短くすることも求められる。これには執刀医の力量だけでなく、看護師や人工心臓を扱う体外循環技士など



低侵襲の技術や、それを実現するためのチーム医療について解説する『榊原記念病院 低侵襲手術書』

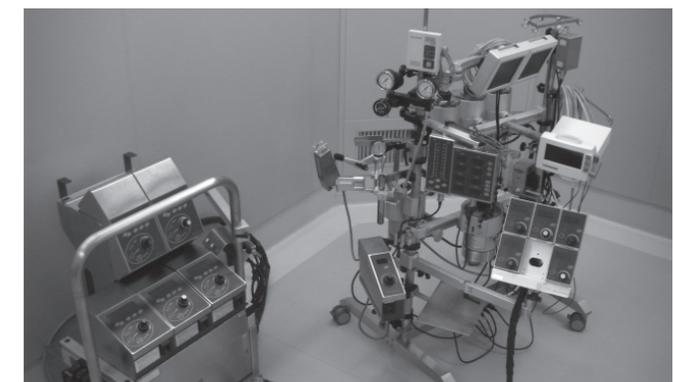
チーム各員の底上げが必須だ。高橋氏は「心臓外科手術はチーム医療の最たるものだが、チーム医療とは、メンバーの技術が傑出しており、最高のスキルをお互いに見せ合うチームワークのこと」と語る。説明をしなくても済むことが増えるようになると、手術時間は必然的に短くなり、他施設と比較して3分の1ほど

で終わられるようになった。こうした努力の積み重ねが、手術成功率98.7%という成果として結実する。

必死に取り組む職業は嬉しい

医学部に入学する頃には外科医を目指そうと決めていたという高橋氏。卒業後、すぐに榊原記念病院への入職を志望する。日本での心臓血管外科のパイオニアである、榊原任先生が創設した病院だ。しかし“未経験者はいない”と断られ、熊本赤十字病医院へ。2年間の全科ローテート研修を終え、再度、榊原記念病院の門をたたく。入職後は、来る日も来る日も子どもの心臓と向き合い、腕を磨くことになる。以来、三十数年のキャリアの中で、およそ7000例の手術を行ってきた。年間200例以上、手がけてきた計算になる。

高橋氏は何度も、“仕事は嬉しい”と語るが、今後はその楽しさを、次世代を担う若者たちに伝えていくつもりだ。「必死になって取り組む職業は嬉しい、子どもと向き合う仕事は尊い喜びに満ちていると伝えたい」と話す。高橋氏は66歳の今も、現役の心臓外科医だ。子どもたちが幸せな人生を送れるように、一刀に心を込めて手術を行っている。



充填量130mlという超小型の人工心臓装置